

平成 22 年度 修士論文

心理臨床家の思考に関する一検討
—事例情報の読み解き方にみる特徴の分析—

弘前大学大学院教育学研究科
学校教育専攻学校教育専修臨床心理学分野

09GP105 大平大貴

目次

第1章 問題と目的

第1節	はじめに	2
第2節	心理臨床家を対象にした研究	2
第3節	心理面接場面における心理臨床家を対象にした研究	4
第4節	心理臨床家に関する新たな研究	5
第5節	認知心理学の知見から	6
第6節	本研究の目的	8

第2章 方法

(1)	調査対象者	9
(2)	調査手続き	9
(3)	調査場所・調査時間	10

第3章 結果と考察

(1)	各対象者の思考の流れの記述	11
(2)	カテゴリー一覧表	13
(3)	見出された心理臨床家の特徴	15

第4章 総合考察

おわりに	—今後の課題と展望—	23
------	------------	----

文献

附録

- (1) 調査依頼時に使用した文書
- (2) フェイス・シート

第1章 問題と目的

第1節 はじめに

カウンセリングとは一体何なのか。日々の心理臨床実践の中で、カウンセラーは何を思い、考えているのだろうか。そこには、単なる身の上相談とは違うカウンセラーの専門性が潜んでいるように思われる。臨床心理学を専攻している心理臨床初心者は、名だたる臨床家たちの面接記録や膨大な事例研究、その他多くの文献などを通して知識や情報を得ることができる。ところが、いざロールプレイや実際に大学院付設の心理臨床相談室等でケースを担当するとなると、途端に身動きができなくなったり混乱したりして、対応に苦慮することが圧倒的に多い。それは、知識や理論が必ずしも体験や実践とイコールにならないものだからであり、実践的な能力が実践によってしか鍛えることはできないことは、実践に関わる専門領域において共通した原則であると思われる。したがって、実践を通して、そしてそこから得られた体験を通して学びを深めていくことが重要であると思われる。しかしながら、カウンセラーがどのようにその場に“居て”何を“感じ取って”いるのか、すなわち目に見える技法や応答といった外的側面の背後にある、直接には捉え難い態度やあり方、意図といった内的側面に関しては、実践を重ねていったとしてもすぐには得られないような体験のように思われる。そのような、熟練者の中では直観や自明のこととしてなかば自動化されている、体験知の正体を言語化し、提示することは可能であり、また必要なことなのであろうか。そもそもその試みは困難を極めるであろう。それでもその困難な作業を経た結果、筆者も含めた心理臨床初心者の学びの一つの指針になるのであるならば、言語化する努力は無駄にならないのではないかと考える。そして、そのような一連の試みが、ひるがえって心理臨床家としての専門性への接近に貢献しないであろうか。

なお、以下本稿で使用しているカウンセラー、セラピスト、心理臨床家等の用語はほとんど同義であると考え、特に区別せず原著論文の表記に従って用いることとした。筆者が使用する場合にもほとんど同様であるが、心理面接場面における心理臨床家について述べる場合には「カウンセラー」と表記することがあること、心理臨床家はカウンセラーを含む上位概念として使用していることを付け加える。また、熟練者と熟達者という用語についても本稿中ではあえて区別せず、原著論文の表記に従った。

第2節 心理臨床家を対象にした研究

1988年の財団法人日本臨床心理士資格認定協会の発足や、1995年のスクールカウンセラー制度の発足など、心理臨床家の働きが世間から大きく注目されるようになっている。現在その活動領域は、小・中学校や福祉施設、職業安定所、企業、警察署など多岐に及び、そのような中で、心理臨床家には、より高度で多様な専門的活動が求められるようになっている、と岩井（2007）は述べている。今後ますます、心理臨床家の社会的立場を確かな

ものにしていくためにも、心理臨床家自らが、日々研鑽を積み、努力し続けていくことはもちろんのことであるが、心理臨床家に関する実証的な研究を積み重ね、教育や訓練に生かしていくこともまた、必要不可欠なことであろう（岩井、2007）。

そこでまずは、これまでに行われてきた心理臨床家を対象にした研究を、上述の岩井をもとに以下 3 つに大別して概観することとする。岩井によれば、わが国の心理臨床家に関する研究は、1960 年代に欧米諸国で行われた研究の追試によって端を発したが、1970 年代から 80 年代後半にかけては、心理臨床家自身が事例研究を通して独自に論じることが多かったようである。その後 1990 年代から現在にかけて、心理療法における科学的・実証的な研究が注目されるようになってきているものの、まだまだそのような実証的な研究は少ないようである。

(1)心理臨床家のあり方・心理治療に影響を及ぼす心理臨床家側の要因に関する研究

田畑（1967）は、クライアントの人格適応変化には、セラピストのあり方が密接に関連しているという仮説を設定し、セラピストとクライアントの心理治療関係において有効に働くと考えられるセラピストの治療的要因について検討した。治療面接の直前（3 要因）、面接中（3 要因）、面接直後（2 要因）の計 8 要因（各 15 項目）からなる質問紙（「心理治療関係の体験目録」）を作成し、因子分析を行った結果、「安定さと充実感」、「積極的な意欲」、「深い尊重」の 3 因子が、心理治療関係において有効に働くことを導き出している。

最近では、葛西（2006）が、カウンセラーとクライアントの治療同盟や面接評価が、カウンセリングの過程においてどのように変化するかを検討している研究がある。その結果、治療同盟については、面接の回数を追うごとにカウンセラーもクライアントも評価が高くなっていくこと、また、クライアントに対するカウンセラーの応答の仕方が、治療同盟の形成に影響していることが示唆された。

上記のような研究結果が見出されている一方で、金沢（2002）は、セラピストが面接中のクライアントとの間に起こる対人関係の微妙なニュアンスに気づき、それに基づいて行動できることが重要であることを指摘している。このことは、わが国の熟練した心理臨床家の間では、常識的なこととして共有されているかもしれないが、それを実証的に明らかにした点で金沢の指摘は重要であるだろう。今後は、そのような心理臨床家熟練者の間で語り継がれてきた心理臨床家のあり方や態度、心理治療に影響を及ぼす心理臨床家側の要因などについて、実証的な研究を行っていく必要がある。

(2)心理臨床家の教育・訓練に関する研究

教育・訓練に関しては、特に、臨床心理士を養成するために専門教育を行う指定大学院の設立以降、どのような養成課程やシステムが必要か、また、効果的かについて議論が続けられている一方で、心理臨床家の訓練・教育の効果についての調査報告、実証的な研究については、まだまだ少ないようである。この種の研究は、臨床心理士の養成課程における教育・訓練の充実と発展に寄与する重要な研究報告であるといえよう。しかしながら、それらの研究の多くが、1 回の実施報告に終わっているようであり、訓練の効果を継続的

に検討しているものは少ない。また、心理臨床初学者を対象とした研究が多く、指定大学院を修了して数年の若手心理臨床家や、中堅者の研修や教育について検討した研究報告も少ないのが現状である。

(3)心理臨床家の発達・熟練に関する研究

山松・森（1965）は、3人のカウンセラーの成長過程に関する自由討議と回想記を検討し、カウンセラーの成長には時には挫折し、時には自信にあふれるなどの起伏があり、充実感はいずれで異なるが、進もうとする方向や感じているものには個人差をこえた共通性があると述べた。武島・杉若・西村・山本・上里（1993）は、精神療法における臨床経験年数と治療者の行動・態度との関連について検討しており、経験年数の長い精神臨床家は短い者に比べて、多様な技法を用いていることが明らかとなった。また、治療者の行動・態度に関する因子分析の結果から得られた各因子（「力動的理解の枠組み」「治療のプランニングにおける能動性」「治療の運営における指示性」「治療者・患者間の治療的関係の柔軟さ」）において、経験年数による違いがみられた。河内・斉藤（2004）は、大学生、大学院生、心理臨床家の3群を対象にして実験を行い、それぞれの被験者群から呈示されたクライアントの情報からどのようにクライアントを理解するのかを検討した。その結果、より豊富な専門的知識を有している心理臨床家の方が、クライアントが語った情報から多くの仮説を立て、クライアントを適切に理解していることが示唆された。これらの研究では、経験年数によって群分けをして、研究を行っているものが多いが、何をもって熟練者と定義するのが明確にされておらず、研究者の判断によって群分けされている現状であることから、今後は、熟練した心理臨床家の特徴、および、心理臨床家の発達・熟練の段階を明らかにしていく必要があるであろう。

第3節 心理面接場面における心理臨床家を対象にした研究

一般に、心理臨床家の活動は、心理査定・心理面接・地域援助・調査研究の4点とされているが、主な活動はやはり、カウンセリングとして広く認知されるようになってきた、心理面接に関する業務であろう。カウンセリングは一見すると、誰にでもできそうな簡単な営みのように思われるが、実際は、眼前で苦しみ、悩むクライアントに対して、臨床状況全体を俯瞰し、緻密にアセスメントした上で、自然さを失わずに、必要な支援を、適切な形で行うという、極めて高度で、かつ意図的な営みを行わなければならない（新保、2001）。効果的なカウンセリングを目指して、これまでカウンセラー要因、クライアント要因それぞれについて検討されてきている。本節では、心理面接場面におけるカウンセラー要因に焦点を当てた研究について概観することとする。

カウンセラー側の要因の一つである、カウンセラーの言語的応答に関する研究はいくつか見受けられる。言語的応答には、解釈や反射、指示、質問、さらには相づちといったものが考えられるが、共感的理解の伝達を意図するカウンセラーの応答と、クライアントに知覚された共感の程度との関連を検討した田中（2006）では、カウンセラーが、「相づち」

「反射」「質問」といったクライアントの体験を描写しようとする応答を多く用いていることが示された。また、クライアントの知覚された共感は、「情報」「反射」「確認」といったクライアントの視点・見方・理解の枠組みにもとづいて意味づけがなされた応答と正の相関があり、「一般的助言」とは負の相関があることが示された。また、適切な「繰り返し」「明確化」がクライアントの自己の内面への注目度にそれぞれ有意な正の影響を及ぼす一方で、不適切な「質問」「繰り返し」「明確化」「支持」がクライアントの内面への注目度に有意な負の影響を及ぼすことを示す研究（中西・鈴木・山本、1998）もある。さらに、クライアント側の視点から、カウンセラーのどのような応答様式をクライアントが希望するのか、質問紙法によって検討した生月・原野・山口（1988）の研究がある。生月らは、何らかのまとまりのある訴えをする際のカウンセラーの応答様式を、価値観への介入、指示、情報提供、援助的応答（何らかの援助をすることを前提に発言を促す）、中性的応答（中性的態度をとり、専らクライアントの発言を受容する）に分けて検討した結果、クライアントは、カウンセラーの援助的応答や情報提供を多く希望することが明らかとなった。その他の要因として、理論的志向性の相違（高橋・潮村、2009）や、指示性（島本、1996）などの要因が検討されている。

第4節 心理臨床家に関する新たな研究

前節では、心理面接場面における心理臨床家の要因に関する研究として、言語的応答や技法といった外的な要因に関する研究が多くなされていることをみてきた。

その一方で、新保（1998、1999）は、熟練者（臨床経験10年以上）と中堅者（臨床経験7年以上10年未満）を対象に、心理面接場面においてどのような意思決定を行っているかについて、その過程を「手がかり」「仮説の設定」「意思決定」「行為の遂行」という4つの過程に区別してそれぞれ研究を行った。その結果、熟練者は、面接事象の中からさまざまな手がかりを取り出しつつ仮説を設定し、直感的なレベルで介入方略を選択し、行為の遂行へと結びつけており、4つの過程がスムーズに行われていることが明らかとなった（新保、1998）。それに対して中堅者は、4つの過程それぞれで情報の見落としや判断の躊躇が起きやすく、時として情報の流れが滞ることになり、結果として非効率的、非効果的な介入が多くなる傾向があった（新保、1999）。さらに、新保（2001）の研究では、心理臨床初心者（臨床心理学を専攻する大学院生）を対象に、どのように事例の理解や見立てを行い、具体的な治療計画の立案を行っていくのかについて調査した。その結果、初心者群の特徴として、自らの思考過程について時間をかけて言語化する傾向や、その表現が抽象的であったり曖昧であったりすること、具体性に欠けることが指摘された。また、情報に圧倒されたり巻き込まれたりして、情緒的な混乱をきたし、仮説の立案に難しさを感じる者が一部いるなど、事例との心理的な距離をとることや対象化することが困難であることも考えられた。これら新保の一連の研究は、心理面接場面におけるカウンセラーの意思決定過程という内的側面に焦点を当てた研究として、意義があると思われる。

心理臨床家の特徴について、学校現場における教師との比較から検討している研究もあ

る（高嶋・須藤・高木・村林・久保・畑中・山口・田中・西嶋・桑原、2007；高嶋・須藤・高木・村林・久保・畑中・重田・田中・西嶋・桑原、2008）。高嶋ら（2007）では、表面上の言動や対応ではなく、それらのものを生み出す「視点」に焦点を当てて、P-F スタディ同様の形式を用いて調査を行っている。その結果、教師は、「指導」「解決志向」などの視点が特徴的で、心理臨床家は、「内面に焦点を当てる」「保留する」などの視点が特徴的であることが明らかとなった。その一方で、「相手との関係に注目」「自分の感情の動きに焦点」など、両者に共通してみられる視点があることや、お互いに対して、相手の特徴を強調して認識しやすいという結果も得られている。

高嶋ら（2008）では、「視点」を生み出すような根本的な「視座」に迫る試みとして、仮想事例を提示し、教師、及び、心理臨床家がどのような情報に着目するのか、また、そこから何を考え、どう見立てや対応を考えるのかについて、自由記述形式で回答を求めた。その結果、教師は、問題行動や対人関係のあり方、社会性や診断といった実際に観察できるものや明確なものに着目し、対応も保護者や専門機関との連携を視野に入れ、具体的、实际的で明確な方向性をもつ一方で、子どもの内的世界や対人関係のもち方を、個別的に見ていこうとする姿勢はそれほど強くないことが明らかとなった。心理臨床家では、学校臨床経験者群は、事例の見方や対応が多面的であり、かつ、さまざまな情報から考えられる可能性を常に考慮しておくために、いったん保留する姿勢をもつことが特徴的であった。それに対して、学校臨床経験が少ない群では、事例に対するコミットが薄く、事例の見方や対応も方向性が定まらないという特徴がみられたことから、心理臨床家は、学校現場での経験が増えるにしたがって、与えられた情報の中で事例にコミットし、その上でさらなる情報を求め、多面的、総合的に全体を見渡そうとする視座をもつようになると考えられた。

これらの研究動向をふまえると、心理面接場面における、心理臨床家の「意思」や「視点」、「視座」といった内的要因に注目した研究を今後さらに充実させていくことが必要であると考えられる。そのことによって、熟練した心理臨床家の間で語り継がれているとされる、心理臨床家のあり方や態度に関する特徴を言語化することにつながるものとする。

第5節 認知心理学の知見から

“熟達者（expert）”とは、ある特定の領域で、長期にわたる学習や練習を積むことにより、数多くの知識（knowledge）や優れた技能（skill）を習得したもののことをいう。それに対して、学習や練習を始めたばかりで、未熟な知識や技能の段階にある者を“初心者（novice）”という。さらに“発達的变化の過程”を、初心者から熟達者へと進んでいく、一種の熟達化の過程として捉えることもできる。これまで三つの領域（記憶や暗算の“超熟達者”に関する事例研究、チェスの熟達者、科学の問題解決における熟達者－初心者の差異）で研究がなされており、その領域で熟達者が習得している、その領域に固有な知識構造や技能の体系について、多くの知見が集積されている。本節では、そのような認知心理学における熟達者研究で得られた知見をまとめて、熟達者のもつ、いくつかの領域に共

通してみられる一般的な性質について知見を整理した新保（2000）の論文を以下に引用する。

- ①熟達者は、数多くの宣言的知識を持っている（たとえば、チェスの熟達者では膨大な駒の配置パターンを記憶している）。しかも、彼らの知識は高度に構造化されており、チャンクの形成による階層構造や、複雑なネットワーク構造に発展している。物理学者の知識には、主要な物理学の原理や概念を節点<node>として発達した、意味ネットワーク構造がみられる。彼らは、そのネットワークにしたがって、素早く適切な知識表現を行うことができるのである。
- ②熟達者は、記憶の負担を軽減して効率のよい作業をするために、巧妙な方略や手続き（手続き的知識）を習得している。彼らは、記憶の中にある特殊なパターンに入力情報を連合させたり、コード変換をしたりすることにより、一度に多量の情報を処理できる。これらは、記憶や暗算の熟達者たちが好んで用いる手続きである。
- ③熟達者は、適切な問題表現を行って、難しい問題も素早く的確に解決する。科学の問題解決では、熟達者は、問題文の表層にはとらわれずに、科学の原理・法則や解答の手がかりなどを文脈から抽出して問題を理解する。分析的思考よりも直観的判断にもとづいて問題を適切に表現し、そして、前向きに作業していくのである。
- ④熟達者は、情報を自動的に処理する。知識の手続き化が進み、技能が高度に体系化されていくと、意識的制御が減衰して自動的処理過程が発達してくる。効率のよい注意の転換や資源の配分にもとづき、速く正確に作業することができるようになる（たとえば珠算式暗算の手続きや、物理学者による一気に問題を解く手続き）。

このように、熟達者は、それぞれの領域では、初心者よりもはるかに優れた技能を習得しているのであるが、その一方で、彼らの能力が本来的に領域特殊性（domain specificity）による厳しい制約を受けているのも事実である。領域を越えて広範囲に知識や技能を適用することは、非常に困難だからである。

しかし、これらの制約を前提としても、知識構造上の特徴や技能における柔軟性（flexibility）・適応性（adaptability）の水準にもとづいて、熟達者は二つのクラス、すなわち、“適応的熟達者（adaptive expert）”と“手際のよい熟達者（routine expert）”に分けられる（大浦、1996）。適応的熟達者は、豊かな内容を含み高度に構造化された知識と、柔軟で適応的な技能とを習得している（物理学者は、問題に関わる原理・法則や問題解決の手続きについての豊かな知識を使って、その状況にもっとも適切な方略を選択しながら問題を解いていく）。それに対して、手際のよい熟達者は、比較的単純な構造をもつ定型的な知識や技能にもとづいて、情報を自動的に処理していく。したがって、少し文脈が異なると、たちまちそれらを適用することができなくなるのである（暗算の超熟達者は、数の記憶以外に、彼らの技能を適用することはできない）。

ここでまとめた知見を、すぐに臨床心理学領域に応用することは難しいと考えられるが、熟練した心理臨床家を認知心理学という熟達者と位置づけると、応用可能性はあるものと考えられる。

第6節 本研究の目的

本研究では、カウンセリング場面におけるカウンセラーの内的側面にとどまらず、心理臨床家の内的側面という広い観点で研究を行いたい。そのため本研究では、内的側面全般を包括する用語として「思考」という語を使用することとし、心理臨床家の思考に迫ることを研究目的とした。

刺激としては、ロールプレイ場面や実際の心理面接場면을記録して提示することがまず考えられるが、これらの方法は、実際の面接場面に近い豊富な情報を提示できる点で優れている一方で、ロールプレイによる刺激場面は、実際の面接場面のリアリティを反映しにくい点に問題があり、実際の面接場면을刺激場面としたとしても、守秘に関わる倫理的問題が障壁となる。また、心理臨床初心者にとって、心理臨床家の思考を垣間見る機会として提供されているのは、事例検討会やケースカンファレンスの場合である。以上をふまえ、事例検討会やケースカンファレンスの場で提示されるような紙面による事例を、本研究では刺激として提示することとした。実際の面接場面に比べると情報が限られている刺激であるが、そこから心理臨床家がどのように事例を理解していくのか、本研究では、事例情報を読み解くプロセスを言語報告してもらうことを通して、心理臨床家の思考に共通する特徴を明らかにしていこうと考えた。その中でも特に、クライアントの臨床像にどのように肉薄しようとするのかについて検討を行いたい。しかしながら、心理臨床初心者である筆者が、心理臨床家の思考に迫る試みは困難を極めると考えられることから、本研究では心理臨床家の思考を、事例情報の読み解きプロセスを通して捉えることを試みる。事例情報の読み解き方に心理臨床家の思考が関連していると仮定するならば、それらを言語化する試みは、心理臨床初心者にとっての学びの指針となりうる点において、意義があるものとする。

第2章 方法

(1)調査対象者

調査対象者（以下、対象者と略す）は、臨床経験年数が9年から38年の心理臨床家12名（男性5名、女性7名）であった。各対象者の属性を表1に示す。本研究では、対象者群を「初心者や中堅者とは区別される、一程度以上の経験を積んだ心理臨床家」と定義し、研究を進めた。

表1 対象者について

	臨床経験年数	性別	調査時点での主たる所属先	取得資格
A	38年	男性	大学の学部	臨床心理士
B	18年	女性	大学の学部	臨床心理士
C	15年	女性	大学の学部	臨床心理士
D	15年	男性	大学の学部	臨床心理士
E	17年	女性	大学の保健管理センター	臨床心理士
F	13年	女性	大学の保健管理センター	臨床心理士
G	14年	女性	総合病院	臨床心理士・産業カウンセラー
H	10年	女性	総合病院	臨床心理士
I	9年	女性	精神科病院	臨床心理士
J	16年	男性	少年院	臨床心理士
K	14年	男性	県警（犯罪被害者支援）	臨床心理士
L	12年	男性	情緒障害児短期治療施設	教育・産業カウンセラー

※臨床経験年数に関して、調査時点での年度をふまえているのかそうでないのかが、対象者によってばらばらである可能性があるが、対象者から得られた情報をそのまま掲載した。

(2)調査手続き

調査に先立って各対象者に、調査の趣旨やデータの取り扱い、調査手順などが書かれた文書（巻末附録1参照）を配布して調査依頼をし、協力の承諾を得た。調査は個別面接によって行うこと、後に分析する際の資料として使用することを目的として、ボイスレコーダーにて録音することに関して、予め了解を得た。

本研究において提示する事例記録の選定にあたっては、守秘に関わる問題を考慮して、既に公刊されている書籍の中から引用することとし、田畑（1987）より、主訴に関わる情報が「これからの人生とりわけ大学卒業後の職業生活等で混乱している」とされている、学生相談の事例を取り上げることとした。既刊の書籍からの引用であることは、対象者に伝えてある。調査の具体的な手続きは次頁の①～③に示すとおりである。

①対象者には、本研究の刺激として採用した面接事例の概要と、その事例の初回面接の逐語記録が記載された用紙（記載はすべて書籍通り）を配布し、それを読んで事例について考えてもらう時間を調査冒頭に約 20 分間とった。その際、読んでいて気になったことや思いついたことがあれば、自由に書き込みをしても構わないこと、また、後刻実施するインタビュー中も、調査終了後も、その用紙は対象者の手もとにとどめ、回収しないことを伝えた。対象者が自由に書き込むことが可能なように、用紙には十分な余白を確保した。

②「この事例について考えたことや連想したことについて、どのようなところからでもよいのでお話しください」との教示のもと、対象者に言語報告を依頼し、インタビューを行った。インタビューの間、筆者は、対象者からの言語報告を聴取するとともに、対象者が強調しているように感じられた語や、繰り返し使用する語、及び、特別なニュアンスが込められているように感じられた独特な表現などを中心に、ノートに書き留めていった。

③インタビュー後、臨床経験年数や臨床歴、取得資格などについてフェイス・シート（巻末附録 2 参照）に記入してもらい、調査を終了した。

インタビュー中は、最初の教示に対して対象者自身が一通り話し終えるまでは、調査者からの質問等を控え、話が一区切りついた時点で対象者が語った内容をより明確にするための確認の質問を行った。すべての対象者のインタビューで押さえるべき内容を、新保（2001）を参考として、(ア)クライアント（以下、CI と略す）の見立て及びその根拠、(イ)CI の臨床像及びその根拠、(ウ)明らかにしたい情報、(エ)面接展開及び予後の推測、(オ)理論や臨床観による影響、(カ)CI の臨床像構築プロセス（事例の読み方）について、の 6 項目を用意し、対象者の言語報告の中にその内容が含まれていない、もしくは、関連する内容に触れられてはいたものの十分明確化されていないと判断した場合には、それについての質問を行って回答を得た。なお、質問は、(ア)～(オ)については、「〇〇について考えていることはありますか？」といった形式で行い、(カ)については、「CI の見立てや臨床像がかたまったのはいつ頃ですか？」といった形式で行った。インタビューの最後に、何か言い足りないことや新たに気づいたことがないか確認して、インタビューを終えた。

(3)調査場所・調査時間

調査は基本的に、調査者の所属する H 大学大学院の研究科に設置してある心理臨床相談室の一室で行った。一部の対象者に関しては、調査者が対象者のところに赴き、対象者と相談の上、調査を行うことが可能と判断された静かなレストランの一角や、対象者の自宅にて行った。対象者の勤務等都合に合わせて調査日時及び調査時間を設定したため、午前 10 時（開始時）から午後 8 時（終了時）までの時間帯にわたっている。インタビューに要した時間は、平均して約 1 時間であった。

第3章 結果と考察

得られたデータから心理臨床家の思考特徴をまとめるにあたり、まず、各対象者から得られた言語反応を、ボイスレコーダーによる音声データをもとに、逐語録におこした。次に、その逐語録を KJ 法にもとづき、カテゴリーに分類した。その際、インタビュー時の調査者のノートや、調査者が感じた印象なども考慮に入れてカテゴリーの命名を行った。また、筆者は逐語録を中心とした読み込みを何度も行い、カテゴリーの修正及び洗練を図った。なお、上述の一連の作業に関しては、指導教官からのアドバイスは受けつつも、基本的には筆者一人で行った。

(1)各対象者の思考の流れの記述

はじめに、抽出したカテゴリーやその根拠となる具体的言語反応（要点）を記載し、各対象者の話の流れから推測される思考の流れを、図1に示す凡例に従ってそれぞれ示した。また、カテゴリー名を中心とした文章でも記述した。さらに、その対象者に特徴的と思われる点（対象者による自発的な語りや、再言及が多い語り、対象者独自の言葉など）についても、文章で記述した。記述にあたっては、インタビュー時に感じた調査者の印象も含めて記述を試みた。

↓ 教示
①カテゴリー名 ・ 具体的言語反応を筆者が要約した内容。
②カテゴリー名 ・ 具体的言語反応を筆者が要約した内容。
↓ 調査者の質問がある場合はここに示す。
③カテゴリー名 ・ 具体的言語反応を筆者が要約した内容。
(…以下続く)
※以前言及したカテゴリー内容に再度言及した場合は、再言及と表記。また、以前言及したカテゴリー内容ではあるが、新たに付け加えたりした場合は、別の言及と表記。
※ 具体的言語反応中に「 」がある場合は、提示事例の引用あるいは要約を表す。
※ ↓ は、沈黙（間）を経て話題が転換されたと判断される部分、調査者の質問によって話題となるテーマが変わったと判断される部分を表す。

図1 凡例

「弘前大学学術情報リポジトリ」への登載にあたり、対象者ごとの面接調査の詳細に関わる部分については、対象者との契約上、非掲載とします。この件の詳細についての問い合わせ先は以下をお願いします。

問い合わせ先

〒036-8560 青森県弘前市文京町1

弘前大学大学院教育学研究科 学校教育講座臨床心理学分野

(2) カテゴリー一覧表

対象者毎に分類したカテゴリーを一覧できる表を次頁に示す（表 2）。

表の作成にあたって、各カテゴリーや言及の際に注目したポイントをまとめて示すことが可能なものに関しては、新たに＜大カテゴリー＞としてまとめた。本研究では、対象者から得られた言語反応は、＜Cl について＞＜セラピスト（以下、Th と略す）について＞＜明らかにしたい情報＞＜面接展開及び予後の推測＞＜事例の読み進め方＞＜理論＞＜対象者自身について＞＜修正可能性＞＜面接構造について＞＜調査者との関係性＞の 10 の大カテゴリーに分類された。＜Cl について＞はさらに、Cl の見立てにおいて注目された 13 の観点（カテゴリー名は“Cl の見立て”として使用、以下“ ”内はカテゴリー名をあらわす）と、“病態水準”、そして対象者が事例全体にわたって一貫して言及していると推測された“Cl の臨床像”とに分類した。＜明らかにしたい情報＞については、14 の観点（カテゴリー名は“明らかにしたい情報”そのまま）で分類した。＜面接展開及び予後の推測＞については、“引き出しうる推測”に言及しているものに加え、“扱う主訴の範囲”と、“他機関へのリファー”に言及しているものも加えてまとめた。＜理論＞については、“事例から引き出された理論”と、“職場環境から引き出された理論”とに分類した。＜対象者自身について＞は、8 つの観点（カテゴリーは 8 つの観点そのまま）で分類した。＜面接構造について＞は、面接前に関する“事前情報の取り扱い方”、面接自体では“Th の切り出し方”に注目した言及を分類した。＜調査者との関係性＞については、調査者被調査者という関係性が反映された言及と判断したものを分類した。＜Th について＞＜事例の読み進め方＞＜修正可能性＞については、カテゴリー名そのものが大カテゴリーとなっている。本論文では、この結果をもとに、心理臨床家の思考について考察を試みる。

表2 カテゴリー一覧表

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L
CIIについて	年齢・性別				◎				○			
	主訴			○	◎				○			
	相談行動				○	○		○		○	○	
	電話予約時の雰囲気				○							○
	申込票											
	両親の年齢			○	○							○
	家業										○	○
	来談時の状況					◎		○				○
	相談行動と面接での状態のずれ											
	口調(口え声)	◎					○	○		◎	○	
	Thとの関係性				○							
	大学での関係性				◎		○			○		○
Thについて	面接時期				◎		◎	○	◎		◎	◎
	病態水準	○	○	◎	◎	◎	◎	○	◎		◎	◎
	事例全体(臨床像)	◎	◎	◎	◎	◎	◎		◎	◎	◎	◎
	Thについて(性別・年代)		◎	○			○	○	○	◎		○
	Thについて(立場・役割・所属機関)	○	◎	◎								○
	講師について(講義内容・電話の趣旨や内容)		◎	◎		○						
	紹介経路(Thと紹介者の関係性)		◎	◎	○							
	相談機関・枠							○	◎	○		
	CIIの主訴の明確化				○			○	◎		○	
	来談動機						○	○		○		○
	家族関係・兄弟関係											○
明らかになりたい情報	経済状況				○						○	○
	大学											○
	居住歴・生活状況(食事・睡眠)							○			○	
	心理検査の必要性							○				
	CIIの発言		○		○							
	非言語的情報							○		○		
	引き出さる予測	○	○	○		○	◎	○	◎	○	○	○
	扱う主訴の範囲								○			○
	他機関へのリファー						○					
	事例から引き出された理論	○	○	◎		◎	○	◎	◎	◎	○	○
	職場環境から引き出された理論	○				○	○	○	○			○
対象者自身について	自分をThとしてみる	○	○			○	◎	○	○	◎	◎	
	Thとの違い	◎	○				◎	◎		◎	○	○
	引き出された経験	◎		○		◎	◎	○	○	◎	○	○
	対象者自身の臨床観	◎				○	◎	○		◎	○	○
	経験談	◎						○				
	対象者自身の内面の言語化		○	◎		◎	◎	◎	◎	○	◎	◎
	事例理解の通筋の言語化	○	◎								○	◎
	修正可能性	○	◎		◎		○			◎	◎	○
	事前情報の取り扱い方	○								◎		
	Thの切り出し方	○				○				○		
	調査者の意図の確認	○		○								
調査者との関係性	調査者への情報提示	○										
	調査者の理解との齟齬を埋める		◎									
	職場環境の業務内容等						○		○			

・横軸は対象者、縦軸は＜カテゴリー＞（左側）と＜カテゴリー＞（右側）をあらわす。

・「○」は言及があったことをあらわす。「◎」は再言及、あるいは追加して言及があったことをあらわす。

(3)見出された心理臨床家の特徴

本研究では、提示された面接事例に関する心理臨床家の思考について、事例を読み解く際の言語反応を分析対象として明らかにしようと試みた。12名の心理臨床家に調査を行い、その結果共通してみられたカテゴリーや語り方などに注目して以下考察していく。

【Th と Cl の関係性への注目】

<Cl について>の中から、“Cl の見立て”（以下、“ ” 内はカテゴリー名を表す）として様々な観点に注目した言及がみられる中でも特に、Th と Cl の関係性に注目した言及をまとめた（G、H、J、K：表 3①～④）。ここでいう関係性とは、Th と Cl との間で行われているやりとりのことである。「この Th にみせる Cl 像としての理解」を強調している対象者がいたことから、この言及をしている最中の対象者は、面接場面における Th と Cl の二者関係を見渡せるような客観的な視点で事例を読んでいたと考えられる。ここから、二者関係における見立てに限らず、アセスメント全般に対して、事例を読む人は、客観的な視点でもってアセスメントしているといえるのかもしれない。

また、“明らかにしたい情報”として、Th の性別や年代に言及した対象者の多くも、「Cl との関係性の仮説を立てるために必要な情報である」との言及で共通していた（B、G、H、I、J：表 3④～⑤）。Th の性別や年代、年齢についての情報は用紙に記載がないため、仮説を提示する形で言及している対象者もみられた。Th との関係性をふまえて Cl を理解しようとする文脈において、Th に関する基本的情報は必須であると考えられる。そのような文脈でなくとも、事例を読む上では重要度の高い情報といえるだろう。

表 3 【Th と Cl の関係性への注目】としてまとめた言語反応例

言語反応例
①Cl が Th にうなずきとかを返しているため、いい意味での関係性は成立しているのではないか。
② Cl は Th とのやりとりの中で泣いている。
③この事例は Th との関わりの中での Cl の臨床像。私の考えは、この Th にみせた Cl 像という理解をしている。
④Th の性別や年代は、Cl との関係を理解する上で必要な情報である。
⑤Th の性別によっては恋愛性の転移感情を扱う必要性があるかもしれない。

【病態水準への言及】

<Cl について>としてまとめた“病態水準”への言及は、C、E、F、J 以外の対象者にみられた言及ではあるが、その中でも G、H、I の 3 名は、属性として病院臨床に従事している対象者群であり、3 名に共通してみられた言及であることから、病院職に従事する心理臨床家の特徴として挙げるのではないかと考えた（表 4）。医者がヒエラ

ルキーのトップにいる環境下の中にいる心理臨床家にとっては、医者ニーズに応えることは必須であると考えられるが、病院臨床の特徴の一つともいえるであろう薬物療法を行うにあたっては、病態水準のアセスメントは不可欠であり、そこに心理士に対するニーズも存在していると考えられる。

本研究において言語反応として言及はなかったものの、この3名は他職種に比べて薬学的知識も豊富に持っているのかかもしれない。

表 4 【病態水準への言及】としてまとめた言語反応例

言語反応例
<ul style="list-style-type: none"> * パーソナリティの問題かと漠然とイメージして読み進めた。 * 自我境界が不安定な曖昧な感じを受ける。 * ある程度の社会生活を送っているのに、神経症あるいは人格障害を疑う。

【非言語的な情報への関心】

＜明らかにしたい情報＞についても多様な言及がなされたが、その中から、C1の非言語的な情報に関心を向けた対象者に注目した（F、H、J：表5）。この対象者群はさらに、本事例が逐語記録であることにも何かしらの形で言及していた。逐語記録による事例提示は、ThとC1のやりとりが明示されているため、前述のようにThとC1の関係性からC1を見立てることが、1つの特徴として浮かび上がってきたとも考えられるわけであるが、一方で、やりとりを紙面によって提示するという方法は、実際の面接場面と比較し情報が制限されてしまうという事実があることを考えると、少なくとも3名の対象者は、紙面提示による限界を認識していたと考えられる。しかしながら、それによって対象者が全くC1の臨床像を膨らませることができないということではなく、それこそ逐語記録の限界をきちんと認識した上で、引き出しうる仮説を可能な限りで提示しようと試みた点に特徴があるといえるのではないだろうか。対象者自身が実際に心理面接を行う際には、様々な情報を総合してC1の臨床像を構築していると推測することができる。

表 5 【非言語的な情報への関心】としてまとめた言語反応例

言語反応例
<ul style="list-style-type: none"> * 逐語記録ではみえない、表情、話し方、名前などを書く字の感じでも臨床像を判断したい。 * C1の表情、雰囲気、化粧ののり具合、服の感じ、ピアスやアイシャドー、姿勢、仕草などの情報が知りたい。28歳で服装が派手なのか地味なのかも気になる。 * 逐語記録の限界はあるけど、表情や仕草とかに私は注目する。

【責任の自覚】

＜面接展開及び予後の推測＞としてまとめたものの中に、対象者自身の職場経験や面接の時期を考慮した、“他機関へのリファー”可能性についての言及がみられた（F、G）。また、C1 の病態水準や面接の時期をふまえて、“扱う主訴の範囲”に関する言及もなされた（I、L）。その他別のカテゴリーではあるが、既往歴や心理検査の必要性について（G）、食事や睡眠といった生活状況について（K）の言及もみられている。

これらに共通していえるのは、対象者自身の対応できる範囲の見極めや、対応するにあたっての責任や役割に自覚的であることである。これまでの臨床経験もふまえて、自分の能力や適性を過小あるいは過大評価することなく、自分を治療的な資源としてとらえ、面接展開や予後の推測が行われている。それは、Th がどのような機関に属しているか、あるいは C1 の置かれている状況がどういったものなのかと照らし合わせることなしには判断できないであろう。

【修正可能性】

“C1 の臨床像”や“病態水準”、“面接展開及び予後の推測”に一度言及した後での、その仮説を修正する可能性に言及するカテゴリーがみられた（A、B、D、G、K、L）。当初の仮説は、各々の対象者によって、C1 のもつ可能性と健全さとを十分に認める方向での判断であったり、逆に C1 の病態水準を重めに査定していたりするものであった。いずれにしても、修正可能性に言及することが、当初の仮説があくまでも暫定的なものであることを強調しているように思われ、一度立てた仮説に過度に執着することがなく、必要に応じて常に修正する準備がある様子と考えられる。今回の調査において、事例記録を読んだ際に注意を向けてはいたものの、語られなかった点がもしあったとしても、それらは放念されずに、対象者の念頭に保持し続けられている可能性がある。新しい情報が加われば、それをもとに仮説を更新、あるいは洗練させることになるのではないだろうか。

【面接構造への言及】

大カテゴリー＜面接構造について＞の中で、提示した事例の枠組みとして、講師（紹介者）から Th に伝わっている“事前情報の取り扱い方”に注目した言及（A、J）、その構造があるゆえの、“Th の（面接の）切り出し方”に注目した言及（A、E、J）がみられた。事例の理解にあたって、面接の枠組みや構造に関する情報が、面接場面で起きていることを正當に評価するために重要であると考えられる。Th の性別や年代といった属性に限らず、Th の所属機関、紹介者から Th への紹介経路、紹介者と Th の関係性といった情報についても明記されてはいないため、“明らかにしたい情報”として言及した対象者が多いことから、これらの情報が有用な情報と考えている心理臨床家は多いといえる。

【調査者との関係性】

A、B、Cにみられたカテゴリーのいくつかをまとめた枠組みとして、＜調査者との関係性＞という大カテゴリーを設定した。ここにDの言及は含まれていないが、Dも含めた4名の対象者は、調査者との接点が日常的にもある大学教員、すなわち、本研究においては調査者と被調査者という関係であったものの、日常的には生徒と先生という関係がある対象者群であった。したがって、言語報告の中にも、その日常的关系性が反映された言及があったと考えられ、その影響が強いと判断されたものをまとめている。それは、事例から純粹に考えたり連想したりした言及というよりは、調査に臨む筆者（調査者）に対する、暗黙裡の指導的あるいは教育的側面があったと考えられる。これは、心理臨床家の中でも特に、教育職に従事する心理臨床家の特徴ではないだろうか。

なお、この大カテゴリーには、その他にG、Iの言及も含めているが、これらの言及は、調査者から対象者の所属先に関する質問をしたことによって引き出された言及であるという点で、事例とは直接的には関係が薄く、調査者と被調査者の関係が反映された言及であったと考え、まとめた。

【Thの視点からの言及】

＜対象者自身について＞としてまとめたものに、対象者が“自分をThとしてみる”ような語りは、CとL以外の対象者全員にみられた（表6）。しかしながら、そのようなThの視点からのみの言及ではないものの、“Thとの違い”という形での言及（L）や、“引き出された経験”から、Thと対象者を対比させる形での言及（C）を含めて考えると、Th側の視点に立った言及はすべての対象者でなされており、対象者側の視点だけで事例を読んでいたわけではないことが分かる。これは、心理臨床領域に関わる様々な立場や理論的背景についての十分な知識を有しているからであると考えられ、各々の拠って立つ理論やこれまでの経験と対比させつつ言及しているといえよう。

表6 【Thの視点からの言及】としてまとめた言語反応例

言語反応例
<p>* Clは相当に辛い状態だと思うので、私の場合は早くその状態から離れるアプローチはしないだろう。</p> <p>* 泣いているClに自分だったらティッシュを渡すかもしれない。</p> <p>* 自分なら、インテークで機械的にでも主訴や病歴など、きちんと聞くこと聞いて、見立てをして、カウンセリングしてもよいか、手に負える範囲か見極める。</p> <p>* 自分だったら、Clが泣いている状況はThが作り出してないか考えるだろう。</p> <p>* 自分だったら2回目以降でニーズとか聞きたいなあと思うことが複数ある。</p>

【言語報告の仕方】

語られた内容は多岐にわたり、発話量も全般に豊富であった。対象者がまとまった量の語りをする際には、調査者なノートに書き込むことができないほど言語報告のスピードが速いことも多かった。インタビューに先立って、事例を読んで思いをめぐらせるための時間を 20 分間とっていた影響もあってか、いずれの対象者の語りも整然としており、言い淀みや言語化困難性を示す兆候はあまり見受けられなかった。また、1 つの観点について、複数の仮説を提示する対象者もあり、様々な可能性を視野に入れているものと判断される。

言語報告の仕方の特徴的な点は、事例に関する語りを進めるのと並行して、その作業を進めつつある“対象者自身の内面を言語化”するカテゴリーがみられたこと（B、C、E、F、G、H、J、K、L：表 7）である。一程度以上の経験を積む中で、自身の思考内容を言語化する能力に長けていくのみでなく、自身の感情、特に陰性的な感情や事例から受ける印象といった、対象者の内面の事情をこまやかにモニターし、それをも言語化していくことに対してより研ぎ澄まされていくのではないだろうか。

また、K と L に共通してみられた特徴として、提示した事例の記載順通りに言及がなされた点である。語りに矛盾が生じていないことから、各々の言及がばらばらなものとして存在しているのではなく、対象者の中では筋として構成されていることが推測される。インタビューに先立って設けた 20 分間では、まとまった事例理解をしていたものと考えられるが、言語報告する際には、事例の記載に沿ってもう一度構成し直しながら語っていたと推測することができよう。

表 7 【言語報告の仕方】としてまとめた言語反応例

言語反応例
<p>*何について話し合っているか、主訴がよく分からない。</p> <p>*主訴がよく分からないが、大学に来てよかったのではと単純に思っていた。</p> <p>*私にとっての情報が足りないままの面接開始なので、読んでいて不安になった。</p> <p>*Cl が言葉にしていない部分を一生懸命 Th が置き換えているような感じで、すごいと思う。</p> <p>*重苦しい感じの面接場面である。</p> <p>*事例の記述の仕方の問題かもしれないが、全体として誰の言葉か考えて読まないといけない部分があって、読みにくくて、すごく疲れた。</p>

【思考の往復】（表 8）

前に一度述べたことについて再度言及したり、言及するために前に戻って事例を読み返し確認したりするような行動、さらに“事例の読み進め方”の言語化が全対象者でみられた（L は言及はないが、読み返す行動が確認されている）。事例の理解に向けての思考が展開される中で、事例を読み進めながら浮かぶ様々な疑問や想像が、事例全体、Cl の臨床像全体を思い描く上でのパーツとして位置づけられており、部分的な情報に目を向けつつも

各々の重みづけを先延ばしにし、各々の情報から連想される内容の整合性や、有機的な関連に目配りをしながら仮説の取捨選択や洗練を行っているともみることができるであろう。

また、日頃の“事例の読み進め方”、すなわち“対象者自身の臨床観”として言及している対象者もいた。日々の心理臨床実践の中に事例を読むことも位置づくわけであるが、それは同時に、それらの実践と切り離して考えることはできないことを意味していると思われる。

表 8 【思考の往復】としてまとめた言語反応例

言語反応例
<p>* その事例の Th は誰か考えたり、想像したりしながら読んでいた。</p> <p>* 逐語記録以外の部分を重視し、Cl のイメージを作った。事例の概要を読んでいる時間が長かった。</p> <p>* Cl がどんな人か考えるときは、今まで出会った人のことを思い出しながら読む。</p> <p>* Th の立場になって、あるいは今まで接した女性の Cl をイメージして、あるいは自分がどういう気持ちになるか思い浮かべながら読んでいた。</p> <p>* Cl の臨床像については、何度も前に戻って読み返していた。</p> <p>* 最初から順にみて、自分ならこうするとか、Cl はこんな感じなどと考えながら、Cl の反応をみて修正しながら読み進めた。</p>

【複数の視点とその往復】

二者関係を見渡せる客観的な視点の存在や、Th の視点の存在についてはすでに述べた通りであるが、後述する Cl に関する言及においては、Cl の視点でもって言及がなされることもあった。これらから共通していえることは、言及の時々によって複数の視点が存在しており、それらの行き来がスムーズに行われていることが、全対象者にうかがえた点である。一つ一つの視点から独立した検討がなされているわけではなく、さまざまな角度で連想がなされ、最終的にはそれらを融合しようとする意図が常に働いていると考えられる。

【“Cl の臨床像” 構築プロセス】

Cl の言語内容を根拠として語っている対象者もいるが、多くの語りが、Cl の言語内容よりも、その背景にある Cl の世界に関心を向けた語りをしていたと思われる。これは、Cl の世界にかなり接近するか、あるいはその世界に入り込まないとなされにくい言及ではないだろうか。語りの最中は、Cl の視点と対象者自身の視点を行き来しながら、連想を重ねているように感じられた対象者もいた。これは、先に述べた、【複数の視点とその往復】を超えた、【複数視点の並存とその往復】ともいえるのではないだろうか。臨床像の内容については、部分的な共通点はみられる一方で、それぞれの対象者の言葉で Cl の臨床像を描写しているという印象を受け、各々の対象者の語彙の豊富さがうかがえた。(表 9)

表 9 【CI の臨床像構築プロセス】としてまとめた言語反応例

言語反応例
<p>* しんどいと認めない（泣けない）状態から、しんどいと率直に表明できる（泣ける）段階に発展してきたのではないか。</p> <p>* CI の今の自分と昔の自分との葛藤が、混沌とした感じに表れているのかもしれない。</p> <p>* この CI は自分のことを否定する感じの人かと思った。</p> <p>* 今の悲しみの世界、辛い過去の出来事にどっぷりとはまっている感じを受ける。</p> <p>* 山あり谷ありの人生だったのだろう。</p> <p>* ある世界から抜け出して大学へ来て、抜け出したいのか、抜け出そうとした自分がおかしいのか、整理がまだついていない。</p> <p>* CI は、過去と現在を比較して話しているので、前は頑張ってたんだけど、今はそれができなくなったという感じなのではと思った。</p>

第4章 総合考察

本研究では、対象者に事例を読んで考えたり連想したりしたことについて言語報告してもらい、その反応を手掛かりにこれまで考察を行ってきた。事例を読むという行為は、心理臨床家にとって身近な研鑽手段の一つでもあると考えられるが、そこには、心理臨床家に固有な読み方が存在しているのではないだろうか。最後に心理臨床家の事例の「読み解き方」とはいかなるものであるのか、その意義とはなんであるのか考察する。

まず、得られた結果から、心理臨床家が事例を読む読み方を、筆者は二つに大別した。一つ目の読み方は、対象者自身の世界を保つこと、すなわち事例世界を客観的に捉えようとする読み方である。あくまでも対象者自身の軸から離れることなく、またその軸を見失うことなく、事例を対象化して読んでいると思われる。それが、事例に巻き込まれずに、整然と語りが展開されることの一つの理由にもなっていたのではないだろうか。これは、大カテゴリー＜対象者自身について＞や、見出された特徴【複数の視点とその往復】から明らかである。

その一方で、対象者自身の世界から離れ、事例世界に入り込んで、あたかも事例世界を対象者が生きているかのような読み方もみられた。【“CIの臨床像”構築プロセス】として考察したが、“CIの臨床像”に関する言及の多くが、そのようにCIの世界に没入しているような読み方をしているように筆者には感じている。

そして、これらを比較したときに、後者の読み方、すなわち事例世界を体験的に生きようとする読み方は、心理臨床家に固有な専門的読み方といえるのではないだろうか。その理由は、心理臨床活動、とりわけ心理面接場面において、ThにはCIの話を聴くこと、CIの世界に聞き入ることがしばしば推奨されているが、その構造と後者の読み方は、非常に類似した構造を持っていると考えられるからである。さらに、心理面接場面では、CIの心の動きに耳を傾けるだけでなく、Th自身の心の動きに耳を傾けること、ThとCIの関係性の中で起きていることに意識を向けることもまた求められる。この営みもまた、本研究によって心理臨床家の特徴として見出された【複数視点の併存とその往復】や、【ThとCIの関係性への注目】とまさに対応すると考えられる。心理面接場面において、心理臨床家がCIと交わろうとするのと同様に、CIの世界を体験的に生きようとするような読み方が存在することが、本研究の結果から明らかとなり、すなわちそれが心理臨床家に専門的な読み方ではないかと考えた。類似する知見は、森田・東畑（2007）が、「臨床的読解」という語を用いて展開している論文にもみられる。

また、この知見は、心理臨床家初心者の事例の読み方に指針を与えるものとなったのではないだろうか。心理臨床家が文献を読むという営み一つを取り出してみても、それが心理臨床家の訓練となり、臨床のセンスや心理臨床家の専門性が獲得されてゆくプロスにもなるのではないかということが、本研究の知見から示唆される。しかしながら、体験知を理論として言語化することの必要性・必然性については、十分な議論が必要な点であると考えられる。

おわりに ―今後の課題と展望―

本研究では、心理臨床家の思考に迫る研究として、事例記録を提示し、心理臨床家がどのように思いをはせるのか、その読み解き方から特徴を分析しようと検討を行った。その結果、これまで述べてきたように明らかにしうる特徴のいくつかを記述することができたと思われる。その一方で、今後一層の検討を要する点も残されており、今後の課題として列挙したい。

第一に、調査対象者の拡大と、所属別あるいは心理臨床家の特徴の記述である。12名という調査対象者は、心理臨床家全般の思考の特徴を明らかにする上では、まだまだ少ないと言わざるをえないだろう。そして、本研究においては、教育職そして病院職に従事する心理臨床家の特徴は明らかにしうる範囲で記述することができたが、その他の職種による特徴は考察していない。今後は、熟練者の定義や臨床経験年数も考慮に入れて、データを蓄積していくことが必要である。

第二に、カテゴリーの抽出と決定に際して、信頼性と妥当性を高めていくことである。カテゴリーをみると、客観的には分類が難しいと思われるカテゴリーがあると考えられる。その原因としては、筆者一人で抽出、命名、配列を行ったことが挙げられるだろう。今後は経験豊かな複数名の研究協力者によるカテゴリー分類の一致率をもとにカテゴリーを抽出するなど、信頼性、妥当性を高める工夫が必要である。

第三に、方法論上の問題と、筆者が心理臨床初心者であることによる本研究の限界点に関してである。本研究では、心理臨床家が事例を読み解いていくプロセスから見出された知見を心理臨床家に共通する思考特徴として考察した。しかしながらそれは、研究目的でも述べたように、便宜的な域を超えるものではないだろう。また、得られた結果には、多少の考察を行った調査者と対象者との関係だけでなく、事例情報と対象者との関係、事例情報内の Th と Cl の関係など、さまざまな要因が混在する複雑な構造であるにもかかわらず、十分な考察を行っていない。これら採用した研究方法から生じる問題は、筆者が心理臨床初心者であるが故に生じた問題でもあった。今後このような研究が行われてゆく際においては、本研究が良くも悪くも土台となり、精緻化されていく知見の出発点として貢献することを願ってやまない。

文献

- 生月誠・原野広太郎・山口正二 1988 カウンセラーの応答様式に対するクライアントの選択反応についての研究 カウンセリング研究, 21(1), 29-38.
- 岩井志保 2007 わが国における心理臨床家研究の概観 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 (心理発達科学), 54, 135-142.
- 金沢吉展 2002 臨床心理学における心理療法教育の目標、方法、および今後の課題 精神療法, 28(4), 14-22.
- 葛西真記子 2006 セラピスト訓練における治療同盟、面接評価、応答意図に関する実証的研究 心理臨床学研究, 24(1), 87-98.
- 河内哲也・斉藤恵一 2004 心理臨床家における専門的知識の利用過程 認知科学研究, 3, 1-9.
- 森田健一・東畑開人 2007 心理臨床家の読み方 ―科学の臨床的読解― 京都大学大学院教育学研究科附属臨床教育実践研究センター紀要, 11, 67-79.
- 中西公一郎・鈴木真理・山本和郎 1998 心理面接訓練としての 20 分のロール・プレイングの量的分析 心理臨床学研究, 16, 396-401.
- 大浦容子 1996 熟達化 波多野誼余夫 (編) 認知心理学 5 学習と発達, 東京大学出版会, 133-153.
- 島本淳子 1996 カウンセラー応答の指示性と来談者の心的状態との適合性に関する実験的研究 カウンセリング研究, 29(1), 9-18.
- 新保幸洋 1998 心理面接場面におけるカウンセラーの意思決定過程に関する研究(1) ―熟練者の面接場面の分析を通して― 大正大学臨床心理学専攻紀要, 1, 35-54.
- 新保幸洋 1999 心理面接場面におけるカウンセラーの意思決定過程に関する研究(2) ―中堅者と熟練者の比較を通して― 大正大学臨床心理学専攻紀要, 2, 56-75.
- 新保幸洋 2000 カウンセラーの熟達化及び成長・発達モデルの構築に関する研究動向 大正大学臨床心理学専攻紀要, 2, 8-23.
- 新保幸洋 2001 臨床心理学を専攻する大学院生の臨床判断能力に関する研究 大正大学臨床心理学紀要, 4, 2-16.
- 田畑治 1967 セラピストの治療的要因の因子分析 臨床心理学研究, 6(1), 31-36.
- 田畑治 1987 来談者中心療法 水島恵一・岡堂哲雄・田畑治[編] カウンセリングを学ぶ〔新版〕有斐閣.
- 高橋功・潮村公弘 2009 カウンセラーの言語的応答に関する実験的研究 ―カウンセリング状況への評価に及ぼすカウンセラーとクライアントの応答志向性の効果― 岩手県立大学社会福祉学部紀要, 11(2), 1-11.
- 高嶋雄介・須藤春佳・高木綾・村林真夢・久保明子・畑中千紘・山口智・田中史子・西嶋雅樹・桑原知子 2007 学校現場における教師と心理臨床家の「視点」に関する研究 心理臨床学研究, 25(4), 419-430.

- 高嶋雄介・須藤春佳・高木綾・村林真夢・久保明子・畑中千紘・重田智・田中史子・西嶋雅樹・桑原知子 2008 学校現場における事例の見方や関わり方にあらわれる専門的特徴 ―教師と心理臨床家の連携に向けて― 心理臨床学研究, 26(2), 204-217.
- 武島あゆみ・杉若弘子・西村良二・山本麻子・上里一郎 1993 精神療法における臨床経験年数と治療者の行動・態度 カウンセリング研究, 26(2), 97-106.
- 田中伸明 2006 共感的理解の伝達を意図するカウンセラーの応答の特徴について ―クライアントへの影響も含めた検討― カウンセリング研究, 39(2), 113-123.
- 山松質文・森美智子 1965 カウンセラーの体験について 臨床心理学研究, 4(3), 1-9.

附録

附録1 調査依頼時に使用した文書

修士論文作成に伴う調査依頼について

弘前大学大学院 教育学研究科
学校教育専攻 臨床心理学分野 2年 大平大貴

本調査は、私の修士論文作成に向けての、データ収集の調査対象者としてご協力していただきたく、お願いしたものです。従って、本調査で得られたデータにつきましては、個人を特定することのない形で、研究データとしてのみ使用・公表させていただくことをご了承いただければと思います。

私は、カウンセラーの思考の道筋や広がりに関心があり、それらを明らかにするような研究を行いたいと考えています。本調査の手続きは、以下に示す通りです。調査全体にかかる時間は約1時間となっております。

1. ある事例の概要と、初回面接の逐語記録が記載された一連の紙を読んで、事例について考えていただきます（約20分）。事例を読んで考える際には、紙の余白にメモをとっても構いません。なお、事例が書かれた紙・メモに関しては、回収致しません。
2. 事例に関する記載を読む中で考えたり、想起したりしたことについて、お話していただきます。メモをとった場合は、それを見ながらお話いただいても結構です。思いつくものをできるだけたくさんお話いただきたいと思います（※）。
3. あなた自身についていくつかお聞きします（フェイス・シートへの記入をお願い致します）。

※聞き逃してしまった点などを後にデータ分析する際に確認する目的で、お話いただく時間はボイスレコーダーにて録音させていただくことをお許しいただきたいと考えております。

※お話いただいた内容そのものを結果として使用することは致しません。話された内容そのものではなく、どのような思考をめぐらし、クライアントの臨床像に迫ろうとするのか、といったようなプロセスの分析を行うための調査となります。

お忙しい中、貴重なお時間を割いていただいていたの調査となりますが、よろしくお願い致します。なお、ご不明な点につきましては、お手数ですが以下の連絡先までお願い致します。

調査者：大平 大貴（おおひら たいき）
所属：〒036-8224 青森県弘前市文京町1番地
弘前大学大学院教育学研究科 学校教育専攻学校教育専修
臨床心理学分野 2年 花屋研究室
連絡先：***@***.ne.jp（メールアドレス）

附録2 フェイス・シート

フェイス・シート

・臨床経験年数： 年

・現在の所属先

・臨床歴（職歴）

・資格

・治療上ベースとしている理論的立場や学派、技法等
（面接において大事にしていることについて）

※以下、調査者記入部分

・調査実施年月日：平成 22 年 月 日
・調査実施時間： 時 分 ～ 時 分

